

みんなと一緒に楽しく活動できる子

塩 見 康 恵

1. 対象児のプロフィール

生徒名 M・T (男) 昭和48年12月16日 (中学部1年、就学猶予1年)、IQ46

精神発達遅滞をともなう自閉症、市内N小学校より本校中学部に入学

(1) 一般的特性

- 身辺処理は自立しているが、日常生活に自分なりのパターンを持っており、それに強く固執している。(生活時間・食べもの等)
- コミュニケーションのための言葉はほとんど持たず、CMを口にするばかりである。
- 他人の言うことがある程度理解でき指示にも従うが、他人との関わりを持とうとせず、集団の中でもひとり自分の好きなことをしており、積極的に集団に加わることはない。

(2) 問題点と研究に取り組んだ理由

本児は、身辺処理はほぼ確立しているが、自分なりの生活パターンにこだわりを持ち、集団の中でみんなと一緒に行動することが難しい。また、指示に従って他人の言う言葉を文字にして書くことはできるが、自発的に文章をつくることはできない。さらに、意志・要求を他人に伝えるための言葉も少なく、自分の要求は、相手の手を引くことで伝えようとしている。そのため、集団の中でも孤立しがちで、今後の学校生活・社会生活が円滑に送れないと思われる。

そこで、このような問題点の改善を図り、本児が集団の中で他人と関わりを持ちながら落ち着いて生活できる適応力を身につけるよう、特に言語面を中心に指導していくことにした。

また、保護者の本児へ望む姿が「意志伝達の手助けが得られ、人と会話ができる子」であるので家庭と学校との連携を探り合いながら、本研究と取り組んだ。

2. 個人目標の設定と研究方法

(1) 個人目標

上記の問題点から、個人目標を「みんなと一緒に楽しく活動できる子」と設定した。

(2) 研究の方法

M男の個人目標達成のため、次のような研究仮説をたてた。

『表出言語を増やすと同時に、友だちと関わる場面を生活の中に多く取り入れれば、コミュニケーションのための自発的な言葉の獲得が期待できる。』

この仮説に基づき、次の指導方針をたてた。

- ①表出言語を増やすために——○言葉の模倣から、自発の言葉へ。

- 要求の伝達を手ぶりから言葉へ。
- ②集団意識の育成のために——○友だちと一緒に様々な活動に参加する。
- 他人との受け答え（会話）の学習。

3. 指導の重点と手だて

(1) 学校における指導

個別指導として、特に作文指導を重視した。教師が文を言うとそのまま書くので、できるだけ言葉かけを少なくし、自分が口にした言葉を書かせるようにした。

また、要求語については、生活全般の中で、その都度ゆっくりと言葉を待つ指導に心がけた。

さらに集団意識の育成のため、行事や毎日の作業学習において友だちや先生と一緒に活動できるよう本児が関心をしめず作業を工夫した。集団の中での言葉の指導については、その主な指導場面を「朝の活動」の時間に置いて、毎日の積み重ねの中で言葉が獲得できるようにした。

(2) 家庭における指導

家庭では、主に表出言語の増加についての個別指導に力を入れてもらった。

要求語に関しては、学校での教師の指導と同じであるよう常に共通理解の上で、本児に対応できるようにした。

また、毎日の日課である「日記」について、次のようなことに重点を置いて指導してもらった。

- 生活パターンの一部となるよう習慣化し、毎日「書く」という意識を持たせること。
- 徐々に言葉かけを少なくし、自発の言葉を時間をかけて待つこと。

4. 指導実践例

(1) 言葉で要求を伝えるための指導（家庭—学校の共通理解を持った指導）

- ① 要求があると、手を引いてその場へつれて行ったり、「はい、はい。」「ふん、ふん。」と言って他人に伝えようとするが、「～してください。」がなかなか言えなかった。家庭では、遊びに出るまえに必ず「〇〇円ください。」と二語文でお金を要求している。

そこで自分の興味の特に強い対象については、二語文で表現できると考え、意図的に要求語を出させる場面をつくって、「～ください。」の言葉を習慣化していこうと試みた。

- 要求がわかっている場合は、指導者が先に文章を言って、それを模倣させる。

（指導者）「ボタンをとめてください。」→（M男）「ボタンをとめてください。」

- 対象が、本児が強い興味欲求を示しているものなら、しばらく言葉を待つ。この場合、少々文章がちぐはぐでも要求は通す。例えば、「テレビください。」（テレビがみたい時）「着換えください。」（着換えがしたい時）など。

② 要求語についてのM男の変容

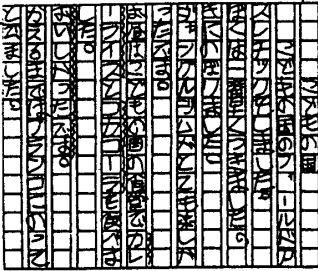
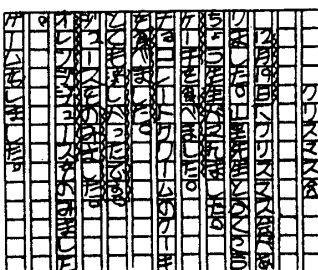
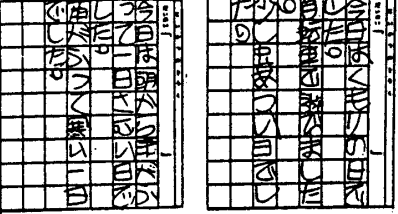
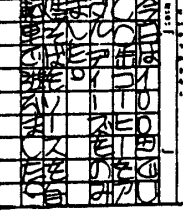
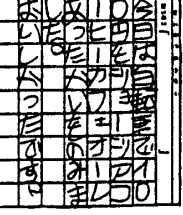
手ぶりで要求を伝えてきてからそれを言葉にするまでの時間が、かなり短くなった。また、「～ください。」も多く聞かれるようになった。

(2) 作文指導と日記指導を通して

① 4月の実態

文章をつくることは全くできないが、指導者の言う言葉どおりに漢字混じりで書いた。

② M男の変容とその間の指導は、次に示すとおりである。(□内は指導)

作文指導と本児の様子 (学校)	学校から家庭へ	日記指導と本児の様子 (家庭)
<p>○教師の言う文をそのまま書く。</p> <p>○手を引くなどの動作で、教師の言葉を待っている。</p> <div data-bbox="295 667 710 779" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>「何を食べましたか。」など質問をして、自発語を待つようにした。</p> </div> <p>○「コココーラ」「カレー」などと答える。(語彙は限られている)</p> <div data-bbox="295 900 694 1012" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>口に出した言葉を文字にして書かせた。</p>  </div> <div data-bbox="295 1288 694 1444" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>「とっても…」と文章を途中で切って、続く言葉が自発的に出てくるのを待つようにした。</p> </div> <p>○「楽しかったです。」「おいしかったです。」等の文章が完成できる。</p> 	<p>○毎日必ず書く時間を設け、習慣づける。(4月)</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>○毎日同じ様な内容を繰り返し、文に慣れさせる。(6月)</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>○言葉かけを少なくし、自発語を待つ。(9月)</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>○「おいしかった。」「楽しかった。」等の言葉が自発的に書けるような文章を工夫する。(10月)</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>※ } 線部がM男自身が自発的に書いた言葉である。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <div data-bbox="550 1854 1069 1892" style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> <p>質問を工夫し、徐々に表出語彙を増やす。</p> </div>	<p>○父母の言う文をそのまま書く。</p> <p>○所々自分が口にした語を書く。(コココーラ、カレー等)</p> <p>○毎日同じような内容のくり返しである。(天候のこと、自転車で遊んだこと)</p>  <p>○時々、ひとりで書き上げることがあったが、文章は完全でない。</p>  <p>○限られた単語は、自発的に書ける。</p> 

○日記は、毎日欠かさず、作文は、行事毎に書いている。

(3) 朝の活動の中で (集団の中での言葉の指導)

○健康調べと日記発表を通した受け答えの指導

		指導の手だてと様子		指導の手だてと様子
一学期	健康調べ	○「元気ですか。」と尋ねられると、「元気ですか。」とおうむ返して答えてしまう。	日記発表	○教師が読むとそれを模倣して読む。ひとりで読むことはない。
二学期		○「元気です。」と答えられる。しかし、自分が当番の時、「元気ですか。」と友だちに尋ねることはできない。 ○毎日のくり返しにより答えることを覚えたが、会話への発展は難しい。		○9月より補助を少しずつ減らすと、ひとりで全文読むことができるようになった。 ○日記を読んだ後、友だちに「何を食べましたか。」「おいしかったですか。」と聞かれると「カレーおいしかったです。」などと答えた。しかし、すべての質問に答えることはできず、答えられる質問は、限られている。

5. 考察と反省

毎日の日記指導や作文指導等の個別指導を通して、表出言語の種類は、増えているように思われる。また、朝の活動の中でもみられたように、それらの言葉を他人とのやりとりの中で使えるようになったことも、生きて働く言葉として定着が期待できる。しかし、本児の内言語はまだ多く、それを表出言語としていく場面をもっと多くつくる工夫が必要であった。特に学校では、作文指導に限らず、毎日の文字指導を習慣づけることが第一であったように思う。

表出言語の増加の過程で見逃がせないのは、本児の集団への適応力が徐々についてきているという事実である。遊びや作業学習の中での本児の他人への関わり方は、4月当初に比べ、かなりの成長がみられる。本児から友だちへの積極的な関わり、友だちも本児を遊びに誘うなどの集団の意識が、それなりに芽生えはじめている。これらの要因も多分に加わっての言語面での成長であったように思われる。

しかし、「人との会話ができる。」というねがいにはまだ遠く、自主的積極的に集団の中で活動することも難しいといえる。

今後も家庭との連携を保ちながら、表出言語をさらに増やし、また、他人とのやりとりの中でそれらの言葉が使えるような場面の設定も工夫して、M男が自分の意志・要求を言葉で伝え、仲間との関わりを一層広げていくことを目指し、指導を続けたいと考えている。